

特別講演 5月29日(土) 14:00 ~ 15:30 小野記念講堂

Après Proust. Écrire la mémoire aujourd'hui

Dominique RABATÉ 氏 (Université Bordeaux 3)
司会：三ツ堀 広一郎 (早稲田大学)

Dominique RABATÉ 氏はボルドー第3大学教授、同大学が発行母胎となる研究誌 *Modernité* の編集責任者をつとめる。20世紀文学研究を専門とし、デ・フォレ研究を出発点として「声」の問題を中心軸にブルースト、ベケット、ブランショ、デュラスなどを論じてきた。現代文学へのアクチュアルな働きかけもさかんに行っており、ンディアイ、キニャールなど同時代の作家論もある。邦訳として『20世紀フランス小説』(白水社クセジュ文庫)がある。最近作は *Le Roman et le sens de la vie* (José Corti書店刊)。今回が三度目の来日となる。本大会の講演では20世紀文学における記憶の問題が扱われる。取り上げられる作家としては、ブルースト、ペレック、シモンなど、里程標ともいべき存在を中心に据えて、さらにはモディアノ、エルノー、キニャールなどの同時代作家に言及がおよぶことになるだろう。

ワークショップ 5月29日(土) 15:45 ~ 17:45 [18:15]

I. フランス研究・フランス語教育の現状と課題

(日本フランス語教育学会との共催ワークショップ)

15:45~17:45 26号館地下多目的講義室

澤田 直 (立教大学、コーディネーター)、土屋 良二 (津田塾大学、コーディネーター)、古石 篤子 (慶応義塾大学)、小野 潮 (中央大学)、越 森彦 (白百合女子大学)、大槻 多恵子 (聖ウルスラ学院英智高等学校、仙台白百合女子大学)

本年度、語学教育実情調査が日本フランス語教育学会と合同で行われる。両学会は数年前からフランス語教育スタージュを共催してきたが、この機会に共有する研究と教育の現状と課題を検討したい。日本におけるフランス語・フランス文学を取り巻く環境が極めて厳しいことは依然変わらないが、研究や教育の現場には変化も見られる。フランス関連の研究を行っている者にとって、自らの専門分野の研究とフランス語教育をどのようにリンクさせるかはたいへん重要な問題である。論点の拡散を避けるために、1. 研究と教育のありかた、2. フランス語教育の目的の多様化に応じた教育のありかた、3. 高大連携を視野に中等教育におけるフランス語の問題、の3点にしばって討議する。すでに何度も語られてきた問題であるが、これまでの成果を総合することで、若手の教員や研究者への示唆を提供できればと考える。また、語学教育実情調査に期待するものも明らかになるであろう。

II. 文学の条件——第三共和制を考える

15:45~17:45 1号館4階401教室

中野 知律 (一橋大学)、鈴木 啓二 (東京大学)、塩塚 秀一郎 (早稲田大学)、千葉 文夫 (早稲田大学、コーディネーター)

コンパニオン、トドロフなど、文学を問う著作活動が気になる昨今である。われわれもまた、文学のチカラを問い直すための場を必要としているのではないか。本ワークショップはその場となるべく、二つの問を絡み合わせる。すなわち書く行為のリアリティに迫ろうとするミクロ的問、フランス文学のイメージ形成に大きな役割を演じた第三共和制をめぐるマクロ的問である。中野知律は、文学教養が大きく揺らぐ時代の転換点にあってブルーストがどのような選択を果したのかを問う。鈴木啓二は文学を条件づける政治・歴史的背景の読解をこころみる。塩塚秀一郎はクノーおよびペレックの仕事をもとに、遊戯的なよそおいをもつ作品世界の背後に第三共和制の現実がどのように透けて見えるのかを報告する。千葉文夫はレリスが参加した民族学調査旅行が国家的事業であったことを確認しつつ、文学的営為が開始される瞬間に眼をむける。

III. シュルレアリスムの何が未知のままか

15:45~17:45 1号館4階410教室

齊藤 哲也 (山形大学)、西谷 修 (東京外国語大学)、野崎 欽 (東京大学)、鈴木 雅雄 (早稲田大学、コーディネーター)

シュルレアリスムはしばしばそれを語るものに、加担するか否定するかを二者択一を迫ってきました。しかし2009年の暮れから刊行のはじまった叢書「シュルレアリスムの25時」は、そうした態度から距離を取ることが、やっと本当に可能になったという認識から出発し、シュルレアリスムの「価値」を判断するよりも、それが誰に対してどのような「機能」を果たしたか、あるいは今でも果たしうるのかを考えようとするものです。今回はこれをきっかけとして、叢書の執筆者と、シュルレアリスムについて独自の視点をもつ論者とが意見を交換しながら、この運動について問われるべき問いとはどのようなものかを考える機会を作ることにしました。無責任な言いかたながら、どのような展開になるか、コーディネーターにもまったくわかりません。登壇者が自由に議論を戦わせる中で、シュルレアリスム研究の新しい可能性の一端が明らかになればと願っています。

IV. 文学研究とBD

15:45~17:45 1号館4階406教室

笠間 直穂子 (上智大学非常勤講師)、古永 真一 (早稲田大学非常勤講師)、森田 直子 (東北大学、コーディネーター)

フランスで「第九の芸術」と呼ばれる BD は、1990年代以降表現スタイルやテーマの多様化により読者層を拡大すると同時に、表現メディアとしての文化的認知度も高まっている。日本でも、徐々にではあるが翻訳・書評等を通じて読者を増やしつつある。仏文学会で BD を題材とするにあたっては、特に文学研究におけるトピックスと BD (およびその前史) とのつながりを表現形式・技法、出版形態、テーマ的傾向などの点から論じ、BD によって文学作品が翻案されるケースも含め、両メディアのあいだに多くの接点が見られることを紹介する。笠間直穂子は主として文学と BD における「描写」の技法をめぐって、古永真一は「ウパポ (潜在漫画工房)」に集った作家たちの試みに注目し、20世紀末以降の BD および BD 研究について話題を提供する。森田直子は BD の前身としての19世紀の絵物語における身体言語や出版媒体の問題を扱う。

V. 人文学の現在と未来 — 映画『哲学への権利 — 国際哲学コレッジの軌跡』をめぐって

15:45~18:15 小野記念講堂

西山 雄二 (首都大学東京、コーディネーター)、水林 章 (上智大学)、藤田 尚志 (九州産業大学)

映画『哲学への権利』は、1983年にジャック・デリダらがパリに創設した半官半民の研究教育機関「国際哲学コレッジ」をめぐる初のドキュメンタリー映画である。この研究教育機関の独創性を例として、本作品では、収益性や効率性が追求される現在のグローバル資本主義下において、哲学や文学、芸術などの人文学的なものの可能性をいかなる現場として構想し実践すればよいかを問われる。ミシェル・ドゥギーなどの歴代議長を含む関係者7名へのインタビューを通じて描き出されるのは、大学、人文学、哲学の現在形と未来形である。上映後の討論は、フランスの共和制理念と教育の関係、人文学的教養の新たな形、哲学と制度の問いなどの議論に当てられる。哲学者デリダがパリに創設した研究教育組織を主題とした映画上映ではあるが、本ワークショップの趣旨はあくまでも、現在の日本において大学や人文学の現状を診断し、討議を通じてその展望を切り開くことである。

日本フランス語フランス文学会 2010年度春季大会

研究発表会 プログラム 5月30日(日)

	午前の部 (10:00-11:00)	午後の部 (12:30-14:00)
A会場 8号館 4階 411	フランス語学・語学教育 司会：青木 三郎 (筑波大学) 1. 多言語教育の e-Learning の推進と学習効果検証 山崎 吉朗 (日本私学教育研究所専任研究員) 2. 潜在的参与項に関わる前置詞 dans 平塚 徹 (京都産業大学教授)	16世紀 司会：平野 隆文 (立教大学) 1. 腹一師匠の人工楽園 — ラブレール『第四の書』ガステルの島における「場所の描写」 上代 綾 (日本学術振興会特別研究員) 2. 歴史的範例とその模倣をめぐるモンテーニュの思索 — 小カトーとエパミノンドスについて 志々見 剛 (東京大学大学院博士課程)
	19世紀(1) 司会：和田 光昌 (西南学院大学) 1. 『人間喜劇』における<再舞台化空間>としてのパリ 加倉井 仁 (早稲田大学非常勤講師) 2. 信仰と知の誘惑 — 『聖アントワーン』の悪魔から『ブヴァールとペキュシェ』へ 中島 太郎 (パリ東大学博士課程修了)	17世紀 司会：谷川 多佳子 (筑波大学) 1. 熱狂と靈感 — デカルト『真理の探究』におけるルネサンス文学の遺産をつうじて 久保田 静香 (早稲田大学非常勤講師) 2. パスカルの『真空に関する新実験』第6実験の解明 小柳 公代 (愛知県立大学名誉教授)
B会場 8号館 4階 412	19世紀(2) 司会：小野 潮 (中央大学) 1. ネルヴァル『東方紀行』におけるデルヴィーシュの表象 田口 亜紀 (國學院大学非常勤講師) 2. ジュール・ミシュレ『フランス革命史』におけるシャルロット・コルデの表象 坂本 さやか (東京大学助教)	18世紀 司会：谷川 多佳子 (筑波大学) 1. 「石も感じなければならぬ」 — ディドロ『ダランベールの夢』における唯物論的パラドクス再考 川村 文重 (Centre interdisciplinaire d'études des littératures, Aix-Marseille)
	19世紀(3) 司会：大出 敦 (慶應義塾大学) 1. 「労働の糸」 — ランボーの女工哀史 折橋 浩司 (早稲田大学大学院博士課程修了) 2. シャルル・クロの色彩写真について 福田 裕大 (京都精華大学非常勤講師) 3. マラルメによるフランス 福山 智 (早稲田大学非常勤講師)	19世紀(4) 司会：Odile DUSSUD (早稲田大学) 1. レオン・ド・ロニー『青竜寺』(1872)におけるオリエンタリズム — フランス演劇初の「日本」をめぐる Chris BELOUAD (大阪大学大学院博士課程) 2. Une esthétique orientaliste : le prisme de l'écriture-voyages Peter TURBERFIELD (亜細亜大学准教授)
C会場 8号館 3階 309	20世紀(1) 司会：山田 広昭 (東京大学) 1. 悲しいマリー — 気分障害の心理学とアランの情念論 新田 昌英 (東京大学大学院博士課程) 2. 私秘的記号としての〈グラディートル〉 — ポール・ヴァレリーにおける〈修練〉の問題系 安永 愛 (静岡大学准教授)	20世紀(4) 司会：Odile DUSSUD (早稲田大学) 1. Claude Lévi-Strauss et le Japon – thèmes et manifestations de la passion nipponophile de l'anthropologue écrivain Hervé-Pierre LAMBERT (九州大学外国人教師)
	20世紀(2) 司会：笠羽 映子 (早稲田大学) 1. ドビュッシューの音楽と文学 — ジャック・リヴィエールの音楽批評を中心に 岡本 尚子 (トゥール大学博士課程修了) 2. 両大戦間の「ジャズ」と人類学との出会いの場、音楽学者アンドレ・シェフネル 昼間 賢 (早稲田大学非常勤講師)	20世紀(5) 司会：高橋 信良 (千葉大学) 1. アントナン・アルトーの書簡作品をめぐる考察 — 直接性について 苅谷 俊宣 (早稲田大学大学院博士課程) 2. アントナン・アルトーの演劇論における残酷概念の変遷 熊木 淳 (早稲田大学大学院博士課程単位取得退学) 3. サミュエル・ベケット『あのととき』における記憶 高山 典子 (東京大学大学院博士課程)
D会場 8号館 3階 310	20世紀(3) 司会：阿部 宏慈 (山形大学) 1. 同性愛とモダニティ — Edith Wharton による Marcel Proust 高村 峰生 (日本学術振興会特別研究員) 2. プルーストの初期作品における「部屋」 — 室内装飾をめぐる 平光 文乃 (京都大学大学院博士課程)	20世紀(6) 司会：若森 栄樹 (獨協大学) 1. 足が見つめる — ジョルジュ・バタイユの親密なる戦争 丸山 真幸 (東京外国語大学海外事情研究所研究員) 2. 構造主義とシモーヌ・ヴェイユ — 神話がひらく倫理の地平 今村 純子 (慶應義塾大学非常勤講師) 3. ドゥルーズの「出来事」概念について — ホワイトヘッドとともに 吉澤 保 (東京大学グローバルCOE 特任研究員)
	E会場 8号館 3階 311	F会場 8号館 3階 312